日本稲作の系譜（下）

――石庖丁について――

石毛直道

一、はじめに

日本の弥生式文化が稲の栽培を主とする農耕生活を軸として展開したものであることは、周知の事実である。弥生式時代のもっとも早い時期の遺跡は北九州に集中して発見される。これらの遺跡から稲そのものや稲粒の圧痕をもつ土器が発見されることから、弥生式文化開始の当初から稲作が行なわれたことは確実である。野生種の稲が日本に存在しなかったとする植物学の通説からおして、稲と稲作技術は、大陸のどこかから北九州に入ってきたものと考えねばならない。しかしながら、日本の稲作の起源をアジア大陸のどこにもとめるかということについては、各方面の研究者のあいだで意見が一致していない。①

考古学の立場より日本の農耕文化の系譜をたどろうと試みるとき、弥生式時代の農具の研究が問題解明のためのきわめて有効な手段となり得る。

弥生式時代の農具の一つに石庖丁がある。石庖丁の日本国内における型式分類、およびそれぞれの形式の分布の研究は早くよりなされている。②石庖丁は日本のみならず中国・朝鮮・台湾の原始農耕文化にもともなう石器である。日本農耕文化の源流をたずねるための基礎的作業として、わたしは主としてアジア大陸における石庖丁の型式分類とその分布、および時代性について考えてみることとする。③

石庖丁という名称は、日本においてすでに一八九〇年から考古学用語として使用されていたが、当初は文字どおり、クッキング・ナイフの用途にあてられた道具であると考え

られていた。[4]

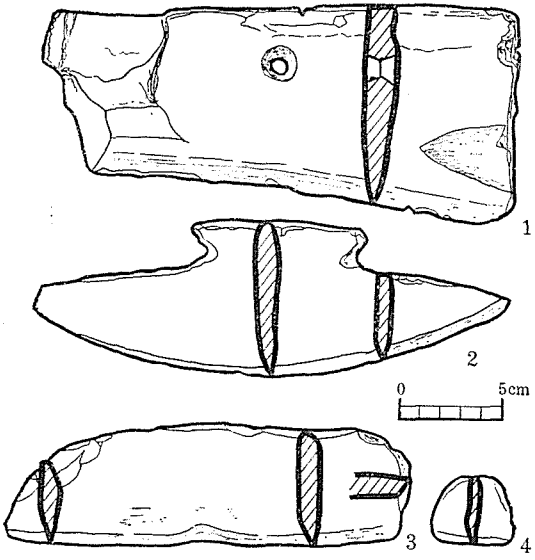
中国では、石庖丁を現在、学術的に石刀とよぶ。しかし、石刀という名称は、石鎌・金属器を石で模倣した有柄石刀とよばれる大きなナイフのたぐい、また細石器文化より発見されるブレイドの類も混同して使用されている。

大陸における石庖丁に、はじめて注意したのは鳥居龍蔵で、一九一四・一五年に発表した報告のなかで、南満州・内蒙古で出土するこの種の石器を、エスキモーの炊事用ナイフに対比させている。[5]

石庖丁を農具と考えたのは、アンダーソンである。一九二〇年、中国北部を旅行中、アンダーソンは高粱の穂を収穫する鉈鎌の使用法を観察し、石庖丁が穀物の収穫具であり、鉈鎌は石庖丁が鉄製品に移行して残存したものであることを思いついた。[6]

一九五五年には、安志敏が「中国古代的石刀」という論文を発表し、中国から出土する石庖丁を、はじめて総括的に論考した。[7]

ここで、わたしが石庖丁としてとりあげるのは、手のひらのなかに握って穀物の穂を摘む農具として使用されたと思われる石器の類にかぎっている。一般に石庖丁の名称でよばれている石器のなかには、穂摘用の農具としては、不適当なものまでふくまれている場合がある。第一図の1は、石庖丁の形態はしているが穂摘具としては大形すぎて使用できない。第一図2は形態が異例にすぎ、大形すぎることが問題になり一応別にしておく。なお北九州より



第1図 穂摘具ではない石器

1. 宮崎県延岡市出土(旧南田村内からという), 延岡市立図書館蔵
2. 福岡県遠賀郡遠賀村上別府, 城ノ越貝塚出土, 九州大学文学部蔵
3. 河南省安陽殷墟出土, 京都大学文学部蔵
4. 福県省閩北将口鎮明山出土, 文献〔63〕から

数例発見されるこの種の石器が、中国浙江省で出土することをつけくわえておこう。これは、のちにのべる日本への稲作伝来の経路を支持する資料の一つともなる。第一図3は殷墟発見の石鎌である。石鎌と石庖丁はしばしば混同されるが、石鎌は石器の刃線と直角な方向に長い木柄をつけて使用し、石庖丁は柄をつけずに手中に握って使用する道具である点を区別せねばならない。第一図4は穂摘具として小形すぎる。

二、型式分類と地理的分布

(1) 型式分類

石という材料による制約、穀草を収穫する道具であるという機能による制約をうけた一見単純な形態を示す石器でありながら、石庖丁のかたちにはさまざまの型式分類の試みをゆるすほど種類がある。

日本における石庖丁については、細かな時代的な差異・地方的な差異を考慮した型式分類がなされているが、大陸の石庖丁については、安志敏は中国出土の石庖丁の型式分類を試みているくらいで、まだ型式分類のうえにもとづいて石庖丁の歴史的意義を明らかにする研究はあまりなされていない。

しかし、現在では中国考古学の発展にともなって石庖丁資料が増加し、東アジア全体の石庖丁を総括した基本的な型式分類をおこなって、その分布、歴史的意義を考察することが可能な段階となっている。

本論文の目的とするのは、東アジア全域における石庖丁を対象として、大きなスケールのモノサシとしての基本的な型式分類とをおこない、それによって石庖丁という石器の変遷をとどることにある。とりあつかう地域の広大さ、時間的経過の長さ、資料として使用可能な遺物の数量などを考慮に入れたとき、現在の段階では、あまりに細かな地方差、時代差はある程度犠牲にして、局部的な型式は基本的な型式に含めることとして論を進めなくてはならない。

安志敏は、中国の石庖丁を

1、両側に打ち欠きのあるもの

2、長方形

3、半月形

の三類に大別して、それら諸型式の地理的分布および編年的研究をおこなった。

わたしは、中国の周辺地帯の特色をあきらかにするために、安志敏のいう半月形をさらに三型式に類別して、以下のような五類に基本的分類をすることとした。

A、両側に打ち欠きのあるもの（打製）

B、長方形（磨製）

C、半月形直線刃（磨製）

D、半月形外彎刃（磨製）

E、紡錘形（磨製）

（2）各型式とその分布状態

五類に大きく分類した基本的な型式の説明とともに、おのおのの型式の地理的な分布を考察してみよう。

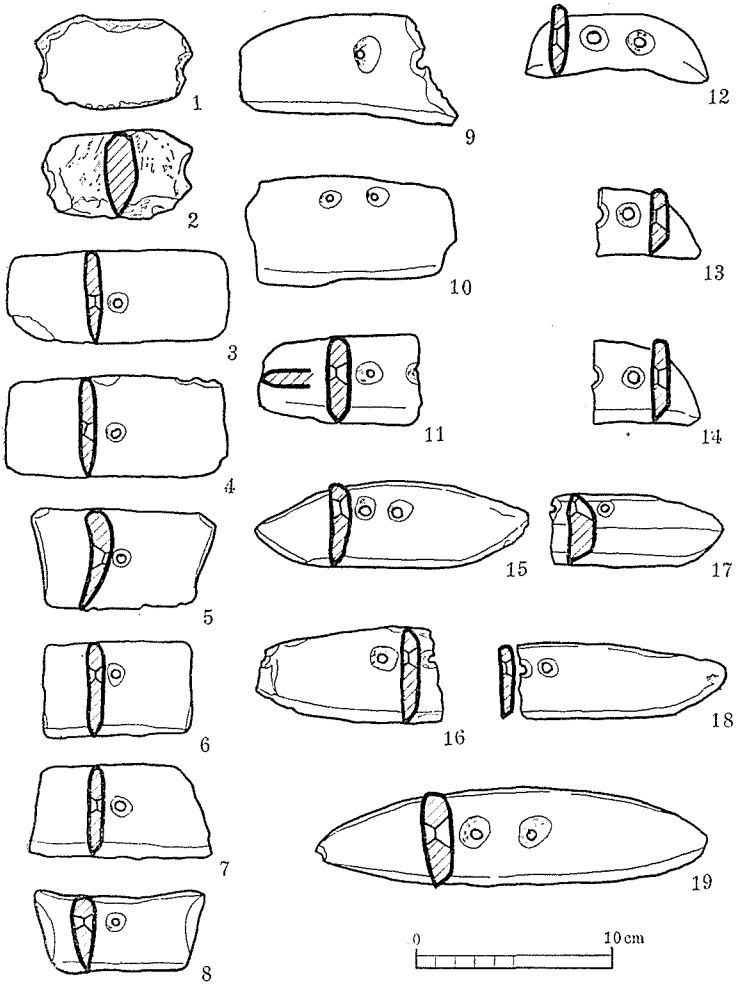
A、両側に打ち欠きのある打製石庖丁（第二図1・2）

ほとんどが、仰韶文化の遺跡から出土する。礫石を割って剥片を得て、これに簡単な打製加工をくわえる。剥片の形に左右され、形態は一定しないが、原則として長方形に近く、短辺の両側に打ち欠きをもうける。この打ち欠きは操作のさいの紐かけとする。ときには、紐かけ用の打ち欠きのないものがあるが、これも同じ類にふくむことにする。[8]

両側に切りこみのある磨製品がまれに出土するが、これらは比較的新しい時期――龍山文化――に属する。[9]両側に打ち欠きをもち、しかも中央に一孔をうがったものが出土した報告がある。[10]型式学的には、つぎにあらわれる長方形一孔のものとの中間型式として理解するべきか。

この両側に打ち欠きをもつ打製石庖丁を模してつくったとおもわれる土製品が、仰韶文化遺跡より発見される。これは陶刀と称され土器の破片を利用して長方形で、その長辺をとぎだして刃部をつけ、両側に紐かけ用の切りこみをうけたものである。この型式の陶刀は、あきらかにA類の打製石庖丁を土にうつしたもので、使用痕のあるものからして実用品として使用されたのである。陶刀は彩陶などの土器片を利用して製作したものが大多数である。まれには粘土でこの形をつくってから焼成する。[11]

A類打製石庖丁は、磨製石庖丁に先行するものと考えられるが、その分布は黄河流域の甘粛・山西・河南省に集中する。とりもなおさず、仰韶文化遺跡の分布と一致すると



第2図　打製・長方形・紡錘形石庖丁

1・2. 甘粛省出土・打製石庖丁の表面および裏面，京都大学文学部蔵
3・4・5. 旧綏遠省出土，京都大学文学部蔵
6・7・8. 河南省陝県七里鋪出土，文献〔8〕から
9～14. 山東半島の石庖丁　9・10・11. は山東省日照両城鎮出土，文献〔41〕から　12・13・14は山東省歴城・城子崖出土，文献〔40〕から
15～19. 遼東半島の石庖丁
15・17・18・19遼寧省雞子窩単砣子島出土，16. 遼寧省雞子窩高麗寨出土　いずれも京都大学文学部蔵

いうわけである。赤峰紅山後第二期文化のように、仰韶文化が地方的な文化に波及して彩陶の発見されるような遺跡にまでは、打製石庖丁の分布はおよばない。すなわち、A類打製石庖丁の大陸における分布は、黄河上・中流の本来の仰韶文化遺跡にかぎられる。A類に属する型式の陶刀は、同型式の石製品にしばしばともなって発見され、分布も同一であると考えられる。

B、長方形

1、一孔のもの(第二図3・4・6・7・8)

孔の位置はほとんど例外なしに、長辺を二等分する場所にうがたれる。しかし、孔が刃部によっているか、背部によっているかは、遺跡によってくせがあるし、使用による刃部の磨滅の度合によっても変化する。中原でもっとも一般的な型式として分布する。A類とともに、河南・甘粛省に多く発見される理由は、この型式のものが、すでに仰韶文化期に出現するからである。この型式は遼東半島ではE類紡錘形にとってかわられるが、北鮮咸鏡北道附近になるとまた出現する。長江流域では、のちにのべるC類、半月形直線刃・D類、半月形外彎刃と交錯している。この型式をうけた土製品がやはり仰韶文化遺跡から発見されるが、土製品の分布は、黄河上・中流の本来の仰韶文化圏の外側にはのびない。

2、二孔のもの(第二図9・10・11)

多くの場合、孔は長辺の二等分線に対して左右対称となるようにうがたれる。孔間の距離は一・五〜三cmのあいだにある。このことは、C・D・E類についてもあてはまる。二孔間に紐輪をとうし、使用時の指がかりとする。[12] 三孔以上の多孔の長方形石庖丁も、この型式に含ませる。しかし、多孔石庖丁の出土例はあまり多くない。また五孔・七孔などの大形品には、形状は石庖丁に似ているが用途の別のものがある。[13]

長方形二孔石庖丁は、中原の龍山文化に出現し、さらに山東の龍山文化が波及して影響をあたえたと考えられる江蘇省の新石器文化と、さらには印文陶を出土する長江下流より南部の地帯にまでのびる。龍山文化の周辺にこの型式が分布することは興味ぶかい。

この型式の石庖丁が西省では、西周時代の遺跡より発見され、時間的経過の長いものであることがわかる。現在、

華地・満州で粟・高粱を摘むのに使用される鉦鎌は、長方形二孔が一般的である。これは、この型式の石庖丁が鉄製品に移行したものと考えられる。

3、一孔・孤状断面を示すもの（第二図5）

水野清一が旧綏遠省で採集したもので、一孔で孤状断面を示す。これと同様のものは、鄭州二里岡と殷墟より出土している。おそらく、殷代特有の型式であろう。凸面を下にして使用したものと考えられ、穂摘具としてはもっとも力学的に進歩した型式である。

4、鳥翼形

刃部よりも背部のほうが長く、台形を逆さにしたような形態で、背部が内彎気味である。内側に鋸歯紋状のギザギザのついたものもある。多くは二孔。

甘粛仰韶文化の羅漢堂・朱家窪遺跡に特徴的な石庖丁として発見される。台湾にも見出される。地方的に限定された型式で、広く分布することはない。

このほか、細長くすみ丸のいわゆる梳形のもの、刃部の凸出気味のもの、刃部の内彎気味のものなどがあるが、基本的には長方形石庖丁の特色を持つものであるかぎり、B類に入れて考えることにする。

C、半月形直線刃（第二図12・13・14）

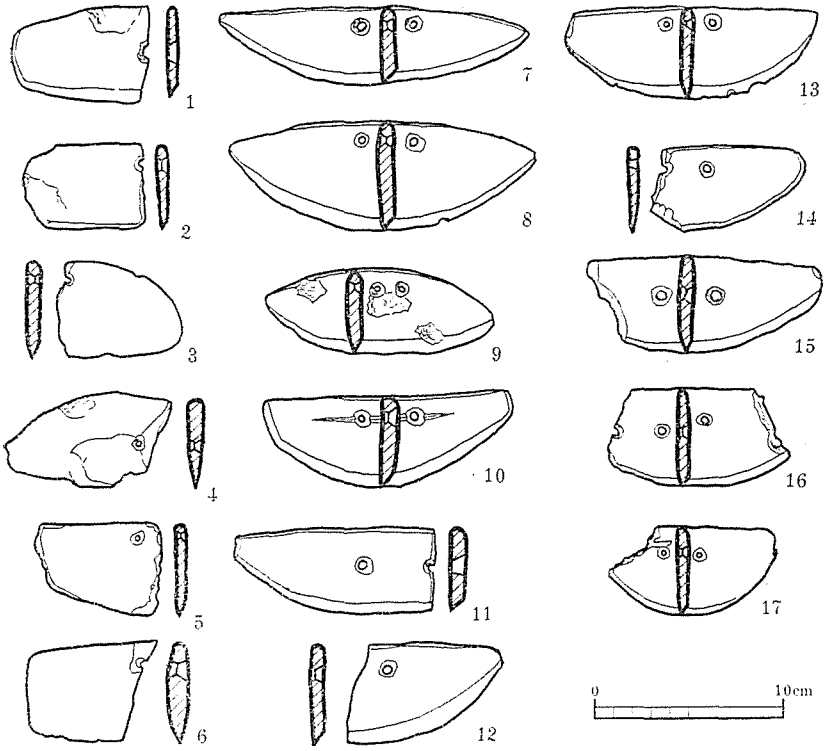
半月形の孤にあたる部分が背となり、弦にあたる部分に刃がつけられる。刃部は直線状あるいは内彎する。刃部の内彎刃は、もともとは直線状であった刃部が、長期間にわたる使用の結果磨滅して、内彎気味になった場合が多い。二孔がほとんど。孔は、器体中央部に相似形をなすよう穿孔されるのがふつう。

中国のほとんど全域に分布する。龍山文化に多い。東北方では、赤峰より林西・北鮮にいたる地帯にかけてのびる。南方では長江下流域より、D類にともなって出土する。この型式に倣った鉄製品は、遼寧省南山裡・朝鮮平安北道渭原の二遺跡より出土している。

D、半月形外彎刃（第三図7～17）

C類とは逆に、直線状の背部と、半月形に外彎した刃部とをしている。長江下流では、一孔のものもときにはあるが、日本・朝鮮では二孔。

二孔で片刃のものが南朝鮮の無文土器文化より数多く発



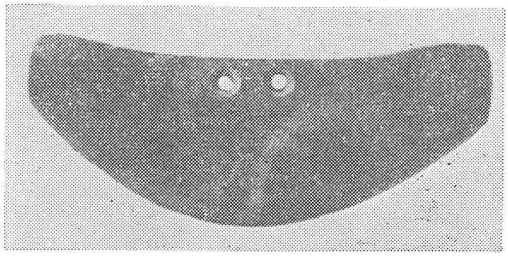
第3図　北朝鮮・南朝鮮・日本北九州の石庖丁

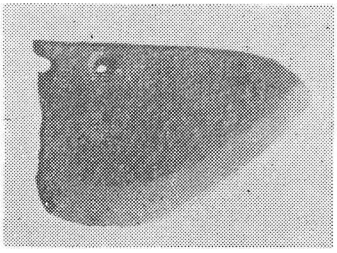
1～6．北朝鮮の石庖丁
　1・2・3．咸鏡北道会寧附近出土　　4．咸鏡北道鐘城三峰里出土
　5・6．咸鏡北道会寧沙乙州出土
7～12．南朝鮮の石庖丁
　7．慶尚北道蔚山郡兵営出土　　8．出土地不詳
　9・12．慶尚北道慶州川北面花山里出土　10・11．慶尚北道慶州出土
13～17．北九州の石庖丁
　13．福岡県筑紫郡春日町須玖岡本出土　　15～17．福岡県飯塚市立岩出土
　12・15・16・17．は九州大学文学部蔵，その他は京都大学文学部蔵

見される。半月形外彎刃型式は、遼東半島よりも発見されるが、数は非常にすくなく、E類紡錘形より派生した例外的なものと考えられる。吉林からも少数の出土例があるが、非常に長大なもので、日本・南朝鮮・長江下流のものと類をことにしている。

C類半月形外彎刃石庖丁の最初に出現するのは、龍山文化のもっとも古い時期にあたる廟底溝第二期文化においてであるが、ここより出土したのは二例にすぎず、いずれも擦切法によって一孔をうがったものであり、鑽孔法によって穿孔を行なう龍山文化期以後の有孔石庖丁とは別の系統に入り、形態も整のったものとはいえない。その後の中原の龍山文化に、半月形外彎刃型式がほとんど出現しないことからも、廟底溝第二期文化の半月形外彎刃形式のものから、周辺地帯のこの型式が影響をうけたものとは考えられない。

中国でこの型式の多く出土するのは、長江下流のデルタ地帯である。この地方の新石器時代晩期および、金属器のはじめて出現する時期に属する遺跡より、半月形外彎刃のものが出土する。この地域では、C類半月形直彎刃と伴出することも多い。長江下流での考古学的調査は、近年になって盛んになったばかりで、報告が少なく、末尾の資料表にあげえたものは数多くはないが、「この型式は江南地区の一般的なタイプである。[14]」とか、「湖熟文化の石庖丁は多く半月形につくる。……刃は多く孤線上にある。[15]」などの記述があることよりも、この型式が長江下流地帯に多く分布することがうかがえる。（第四図）





第4図　長江下流の石庖丁
1. 浙江省呉興銭山様出土 12 cm
2. 浙江省杭州老和山出土 6.5 cm　いずれも文献〔61〕から

E、紡錘形(第二図15〜19)

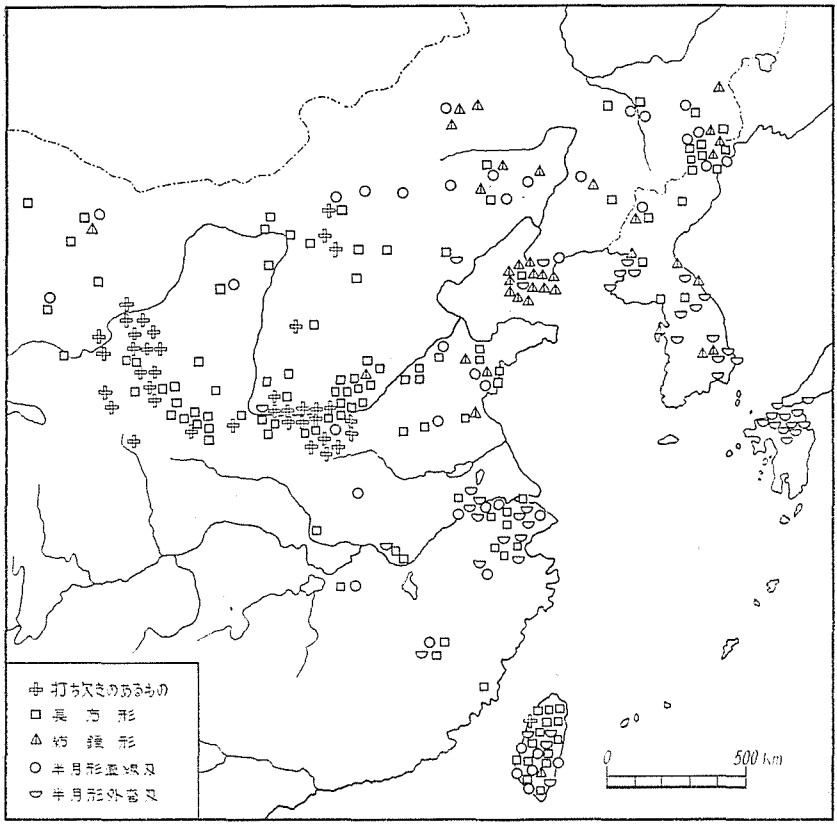
杏仁形ともいわれる。背部、刃部ともに外彎する。二孔のものがほとんどである。

満州に多い型式である。ことに、遼東半島の新石器時代に優勢をしめる。遼東半島の諸遺跡より出土するものは、すべて片刃二孔であり、細長く、刃部中央附近では長線的な刃線をしているくせがあるし、また背面のうちの一面は扁平で、刃をつけた面が隆起しており、この凸な面には、しばしば刃の方向に平行な稜のはしる遺物がおおい。

安志敏は、外彎刃石庖丁のうちには、農具ではなくて、ナイフとして物を断ち切る道具として使用されたものがあるという。その例に、遼東半島の羊頭窪出土の石庖丁を例にとり、これは農耕をいとなまず漁猟牧畜の段階にあって石庖丁をナイフとして使用したものだとしている。しかしながら、遺物にあたってみると、羊頭窪をふくむ南満州に圧倒的な紡錘形二孔石庖丁はすべて片刃であり、しかも厚手の器体とにぶい角度をした刃部をもつものであり、工作具あるいは調理用ナイフとしては実用に耐えないであろうことが観察される遺物がおおい。また羊頭窪を含む南満州の石庖丁を出土する遺跡が、漁猟牧畜経済にたよっていたとは考えがたく、作物の種類は不明にしろ、穀物栽培が行なわれており農耕と漁猟をあわせて行なっていた文化に属すると考えたほうが妥当である。[16]

(3) 分布のまとめ(第五図)

以上の五類に分類したものを、地図上にあらわしたものが、図版未局にあげた石庖丁型式別分布図である。図示の方法としては、一遺跡より二型式以上出土したときは、おのおのの型式を示すマークを隣接して記入する。出土数量および時代差は無視する。そこで、ある地方の特定の文化期において、一般的でない型式が小数出土したとしても、図示の性格上、その文化期において一般的な型式と同等の資格でマークが記されている。数量および時代性を図のうえにあらわすことができたら、説得力の強いものとなろうが、広大な地域を対象としているので、文化の時代性の不明確なものや、出土数量の型式別の記載のない報告がかなりまじっており、やむをえずこのような図示方法をとった。しかしながら、この型式別分布図によって、ある程度地理的分布の傾きをうかがえるであろう。分布図作成の基礎と



第5図　石庖丁型式別分布図

して使用した資料は、資料表（本論文末尾に附す）について参照されたい。

まず、大陸部における分布をとりまとめてみよう。

仰韶文化圏には、A類、両側を打ち欠いた打製石庖丁が集中して発見される。B類長方形一孔のものは、仰韶文化圏のみならず、いわゆる中原一帯をおおい、南は華南にまでのびる。B類の長方形二孔のものは、一孔のものの分布する地域と分布が重なりあうのみならず、長城地帯をこえてひろがる。南満州では、E類、紡錘形が主流となる。C類、半月形直線刃は、山東より、龍山文化の波及した辺境地帯にひろがり、長江下流で、B類、D類が交錯する。のちにのべるが、長江下流地域では、B類は、C類、D類よりも古い時期に属するもののようである。D類、

半月形多彎刃は、長江下流のほか、南朝鮮に一般的である。これに対して、北朝鮮では、B類・C類の直線刃の石庖丁が多い。

分布図に見るように、台湾の先史時代遺跡よりは、五類にわけたすべての型式が出現している。国分直一によれば、B類、長方形は縄蓆文をもつ紅陶にともなって出土し、比較的古い文化に属するという。しかしながら、台湾における先史文化の編年がいまだ確立せず、大陸の先史文化との関係を不明確な現状では、台湾における石庖丁はさまざまの型式を含んでいるというにとどめ、型式ごとの歴史的前後関係はのちの問題として残しておく。国分によれば、台湾において石庖丁と結びつく作物は稲であるとされる。[17]

つぎに、いままでふれなかった日本の石庖丁の分布を概観してみよう。大陸との関係を考えることが本論文の趣旨なので、日本と大陸の橋わたしをする半月形外彎刃の型式しか分布図には記入してないが、日本では、さまざまの型式が、地域差と時代差をもって分布する。

北九州では、弥生式時代最古の時期より、すでに、半月形外彎刃二孔が出現することが確かめられる。この型式は北九州弥生式時代の前期に盛行し、中期になってもその伝統をたもつ。山口県も北九州と同様な傾向を示す。北九州の中期には、少数だが、長方形・半月形直線刃・紡錘形があらわれる。南九州・四国・中国地方では、長方形・紡錘形・半月形直線刃の型式がみられる。瀬戸内地方では、安山岩製の打製石庖丁があらわれるが、これには両端に紐かけ用の打ち欠きを持つものが多い。仰韶文化の打製石庖丁が、一面にも自然の礫面をのこし、二次加工をほとんどくわえないのにたいして、瀬戸内地方のものは、原石の剥離性を充分利用し、礫面は残さず、背部および両側に細心な二次加工がくわえられ、仰韶文化のものと製作技術においてことなる。打製石庖丁の分布する地域でも、小数ながら磨製の紡錘形のものを出土する。宮崎県では、磨製で両側に切りこみのあるものが出土するが、時期は中期以後である。

幾内では、前期には半月形外彎刃の型式も見うけられるが、中期になると半月形直線刃のものが盛行する。

中部地方では、長方形・紡錘形・半月形直線刃があらわれるが、伊那地方で長方形一孔のものが多く出土している。

日本の他の地方では、すべて二孔が原則であるのに対し、強い地方色を示している。

東海・関東地方では石庖丁をほとんど出土せず、他の道具で収穫が行なわれたことを思わせる。

東北地方の仙台および福島平野で、北九州とおなじ半月形外彎刃の形態があらわれるのは、興味ぶかい問題である。ただし、時期的には、もちろん北九州のものより、後の時代に出現するものである。

このように、日本では短かい時期に、かなりの動的変化をとげているが、北九州の半月形外彎刃の形式が、稲作の伝来とともに入ってきた大陸とつながる日本の最初の石庖丁であることは、時期的にも、また他の文化要素との関係においても支持される。

三、時代的な変化

前章でのべた石庖丁の空間的な横のひろがりを、時間的な経過を軸とする縦の関係に整理してみよう。石庖丁とならぶもうひとつの収穫具である鎌についても、ここで考えることとする。

仰韶文化の主な作物が粟であったろうことは、山西万泉荊村・陝西西安半坡村・陝西華県柳子鎮などの遺跡から粟の出土することよりも知られている。アンダーソンは仰韶遺跡より、稲の圧痕のついた土器片を発見しているが、この土器が仰韶期のものであるかどうか疑問がもたれているし、またこの稲粒が仰韶期のものとしても、南のモンスーン地帯より運ばれたものではないかとも考えられている。[18]

現在でも、華地には粟・黍の収穫のとき、太い稈部を残して、穂先きだけを摘みとる方法が行なわれているという。[19]仰韶文化の打製石庖丁は、主として粟の穂摘具として使用されたものにちがいなかろう。

ついで、仰韶文化のうちに、長方形一孔の磨製石庖丁があらわれる。両側に切れこみをもち、しかも一孔をうかがった異形品がまれに出土するが、これは型式学的には、両側に打ち欠きをもつ打製石庖丁と長方形一孔のタイプの中間型として位置づけられる。しかし、このような図式どうり発展したものであるかどうかは、仰韶文化のうちでの諸遺跡の時間的前後関係がわからないので確言をすることはできない。

両側に打ち欠きのある打製石庖丁も、長方形一孔タイプも、仰韶文化において、同様の形態をした土製品をともなっている。

廟底溝第二期文化とよばれる早期の龍山文化では、まだ打製石庖丁および石庖丁形土製品をのこしている。しかしながら、同遺跡の第一期文化とよばれる仰韶文化に属する同型式のものにくらべて、形態がととのったものになっている。

つぎの、河南龍山文化の段階になると、打製石庖丁形土製品は消えてしまうが、長方形一孔石庖丁はうけつがれる。龍山文化では、長方形二孔石庖丁と半月形二孔石庖丁の二孔をもった型式が出現し、龍山文化の展開とともに、二孔石庖丁は周辺地帯にもひろがってゆく。龍山文化にともなって、新たに登場する収穫具として、貝庖丁・石鎌・貝鎌がある。

貝庖丁は、中国考古学では蚌刃とよばれ、ドブ貝の類の殻を利用して孔をあけ、紐かけをつくった穂摘具であり、その形態はだいたいにおいて、石庖丁の型式をそのまま貝にうつしたものである。

貝庖丁には、半月形直線刃または半月形外彎刃に近い形状のものがおおい。二枚貝の殻の形よりして、必然的にいずれかの形態をとることになるわけだが、あるいは半月形直線刃・半月形外彎刃の石庖丁の起源と関係があるのかもしれない。

龍山文化に出現する石鎌・貝鎌が中国の遺跡では石庖丁をともなって同じ遺跡から発見されることがあるのは、どのような理由によるものであろうか。必然的に穂摘を必要とする栽培植物としては、粟・黍のたぐいの稈の太い作物がある。このような作物に対しては穂摘を、その他の作物に対しては鎌を使用して根刈をするといったような、作物の種類による収穫法のちがいが、二種の収穫具を伴出するのであろうか。または、満州で高粱を鉄鎌で根刈りしたのち、あらためて穂首を石庖丁状の鉄製品（掐刀）で切っているが、このように同じ作物を二種の道具を用いて収穫したものであろうか。[20] また、鎌の存在をもって作物の根刈りに直ちにむすびつけるのは早計であろう。東南アジアでは鉄鎌を使用しながら稲の高刈りを行なっているし、草刈り用の道具として鎌が使用されたのかもしれない可能性もあ

る。

龍山文化の石鎌は、半月形に彎曲して、現在の草刈り鎌に近い形態のものが多い。貝鎌には、刃部に鋸歯状のギザギザのつくことがしばしばあるが、貝庖丁には見られない。これは柄をつけて引き切る道具としての鎌と、テコの原理を応用して摘む道具としての貝庖丁の機能上のちがいをあらわしている。鋸歯状の刃部をした貝鎌は、鋸鎌の最初の形態を示すものであり、殷代に出現する青銅製の鋸鎌は、貝鎌よりうけつがれた原理にもとずくものであろう。甘粛では、斉家期になって石鎌が出現する。[21]

蔣縉初は江蘇の原始文化を四つに類型化しているが、この順にしたがって中原東南方の石庖丁を観察してみよう。[22]

第一類型とされるものは、山東の典型的龍山文化とほとんど同じものであり、城子崖と同じような黒陶が出土する。この類型のうちに含まれる徐州高皇廟よりは、半月形直線刃二孔の石庖丁が出土し、城子崖・両城鎮と同じタイプを示している。

第二類型は、いわゆる青蓮岡文化であり、黒陶のほかに紅陶を多く出土し、紅色のスリップをかけ、彩色のあるものも発見される。彩陶の影響もうけた一種の土着文化とされている。この類型にいれられている花庁村および無錫仙蠡墩よりはB類長方形二孔を、無錫許巷よりはC類半月形直線刃二孔石庖丁を出土し、石庖丁においては山東龍山文化と同様な傾向を示している。

第三類型は、浙江龍山文化とよばれるものと同じで、良渚鎮に典型的にあらわれる黒色のスリップをかけた整美な黒陶および有段石斧、石鏃などを出土する。この文化に属する昆山栄荘よりは、やや角ばった刃部をしたD類半月形外彎刃二孔石庖丁のものを出土している。

第四類型は、いわゆる湖熟文化であり、砂をまじえた紅陶のほか、印文陶も出土する。梯形の扁平片刃石斧が多く、有段石斧もともなう。青銅器が出現することが、この文化の特色であり、銅鏃・斧・青銅製ナイフ・釣針などの青銅製品が発見されている。この時期に属する南京鎖金村ではC類半月形外彎刃石庖丁・D類半月直線刃石庖丁の二型式を出土するが、半月形外彎刃の出土例のほうが多い、やはり、同じ類型に属する浙江呉興銭山漾遺跡上層よりは、半月形外彎刃二八個、半月形直線刃三〇個が出土している。こ

の遺跡の下層は黒陶をともない龍山文化の影響がみられるが、下層よりは長方形のもののみが発見される。なお、下層は泥炭遺跡となっており、稲が発見されていることが注意される。[22]

これら、浙江・江蘇・安徴省などの長江下流デルタ地帯の遺跡は、いわゆる台形遺跡となっているものがおおく、現在では水田をひかえて数メートル高い小丘のうえに発見される。台形遺跡のなかより稲の発見されることより、稲作がおこなわれていたことがわかる。[23]

ひるがえって、中原の東方をみれば、紡錘形が遼東半島に出現する。遼東の新石器文化は龍山文化と関係があると考えられるが、時期的には周末までくだると考えられる貔子窩高麗寨遺跡の時代まで紡錘形はつづく。

華北では殷代になると、河南七里鋪の殷代早期遺跡より長方形一孔の石庖丁が多く発見されている。[24] しかし、殷墟の段階になると、おびただしい数量の石鎌が発見されているのにくらべて、石庖丁は非常にすくなくなる。[25] 龍山文化の石鎌が半月形であったのにたいし、殷代の石鎌は非常に直線的なものになる（第一図3）。数量はすくないが、青銅製の鋸鎌も殷代にあらわれる。

西周代に長方形二孔のものが出土しているが、やがてこの型式は、現在の民俗例に見るような鉄製品に変化してゆく。[26]

朝鮮では無文土器にともなって石庖丁が発見されるが、櫛目文土器と一諸には出土しない。朝鮮の南北で型式が異なることは分布図にみるとうりである。石剣をともなう支石墓より発見されることにより、南鮮では半月形外彎刃が初期金属器時代まで使用されていたことがわかる。

四、稲作と石庖丁

仰韶文化において、粟の穂摘具として成立した石庖丁は、やがて磨製で孔をもつものとなり、龍山文化とともに各地にひろがってゆく。モンスーン地帯に属する長江中・下流では、新石器時代にすでに稲作を行なっていたことが出土米によって知られている。[27] 中原より伝わった石庖丁は、この地方では稲の収穫具として使用された。同じく現在、稲作地帯である東南アジアおよび、中国のインドシナ半島よりの地方で石庖丁の出土をみないのは、これらの地域が石器

使用のころは中国文化圏の外に位置していたことを物語る。

長江下流のデルタ地帯で、印文陶や有段石斧をともなう新石器時代末期の遺跡、および金属器の登場する湖熟文化の遺跡の時代になって、この地方で特徴的な型式として半月形外彎刃石庖丁が生れる。もちろん、この型式は稲の穂摘に使用されたものであろう。湖熟文化の上限は殷末、下限は戦国時代にくだる。

D類半月形外彎刃型式は、朝鮮南部に多く分布し、日本へは弥生式時代のはじまりに稲とともに伝えられた型式である。

稲は粒形により、日本型(Japonica)、ジャワ型(Javanica)、インド型(Indica)に分類される。日本の弥生式時代より出土する稲は日本型がほとんどである。南朝鮮の金海貝塚より出土した稲も日本型であるし、[29] 朝鮮の在来種には日本型がおおい。長江中、下流より出土する稲の品種に日本型がわりにおおいこと、[30] 現在長江下流地域では日本型がおおく栽培されていることに注意される。[31]

安藤広太郎は稲の品種およびその野生種の分布に関する研究より、日本の稲作の起源を長江下流デルタ地帯にもとめた。華地・北朝鮮をへて日本に稲が伝えられたとする以前に主流であった意見は、[32] 南北両鮮における稲を示す方言のことなること、南満州から北鮮にかけて稲作を古代におこなったとは気候的に考えられないこと、北鮮における古代稲作の証拠のないことよりしりぞける。

長江下流・南朝鮮・北九州は対島海流を利用すれば交通は比較的容易である。モンスーン地帯にあたり、古代より稲作のおこなわれたこの地方に半月型外彎刃型式の石庖丁が発見されるのは、偶然の結果ではあるまい。わたしの石庖丁の型式分布よりする研究も、安藤説を支持し、長江下流から南朝鮮と北九州に稲作が伝えられ、稲にともなってその収穫具として半月型外彎刃石庖丁が分布したと考える。

① (A)、安藤広太郎『日本古代稲作雑考』一九五一
(B)、盛永俊太郎ら、『稲の日本史』(全五巻) 一九五五・五七・五八・六一・六三
日本の稲作起源に関するさまざまの系譜論は上記二書に紹介されている。

② (A)、赤堀英三「石庖丁の伝播」(『考古学』一—5・6) 一九三〇
(B)、森本六爾、「石庖丁の諸型態と分布」(『日本原始農業新論』一—1) 一九三四

(C)、小林行雄「石庖丁」（『考古学』八―7）一九三六

③ 水野清一「石庖丁」（『考古学』八―1）一九三七
これは日本の研究者が中国の石庖丁を考察した小論。

④ (A)、若林勝邦「江藤正澄氏所蔵の石庖丁ニツキテ」（『人類学雑誌』39）一八九〇
この論文が石庖丁という名称を公表した最初であろう。
(B)、梅原末治『鳥取県下に於ける有史以前の遺跡』一九二〇
本書には石庖丁の集成図があげられ、日本の石庖丁が中国・朝鮮と関係を持つものであることを明らかにしている。しかし、この段階では、石庖丁は調理用のナイフと考えられていた。

⑤ (A)、Torii R., "Populations Primitives de la Mongolie Oriental"（『東京帝国大学理科大学紀要』36―4）一九一四
(B)、Torii R, Etudes Archaeologiques et Ethnologiques Population Prehistoriques de la Mandchrie Meridional"（『東京帝国大学理科大学紀要』36―8）一九一五

⑥ (A)、Anderson, J. G., "An Early Chinese Culture"（中華遠古之文化）（Bullitin of the Geological Survey of China 5）一九二三
(B)、Anderson, J. G., "Children of the Yellow Earth" 一九二三
(C)、Anderson, J. G., "Reserches into the prehistory of the Chinese"（Bulletin of the Museum of Far-Eastern Antiquities 15）一九四三
アンターソンの石庖丁に関する見解は、(C)の文献にまとまっている。

⑦ 安志敏「中国古代的石刀」（『考古学報』10）一九五五

⑧ 廟底溝第一期文化（仰韶文化）に例をとれば、両側に打ち欠きのあるもの23個に対し、打ち欠きのない打製品は6個出土している。紐をかけるための設備がほどこしてないだけで、使用のさいにはやはり両側に紐をまわして用いたものであろう。打ち欠きのあるものとないものは共存し、時期的前後関係はないと考えられる。

⑨ ⑦の文献に、陝西・長安、開端莊出土の龍山文化に属するこの種の磨製品の写真がある。

⑩ 陝西省文化管理委員会「鳳県古文化遺跡清理簡報」（『文化参考資料』一九五六―2）

⑪ 中国科学院考古研究所「廟底溝與三里橋」（『中国田野考古学報告集考古学専刊』丁―9）一九五九

⑫ 二孔間の距離とは、孔の貫通部での最短距離を示す。

⑬ 饒惠元「略論長方形有孔石庖丁」（『考古通訊』一九五八―5）
この論文で、七孔・五孔の大長方形石庖丁は、柄をとりつけて使用した工具であることが考証されている。

⑭ 南京博物館「蘇州和呉県新石器時代遺跡」（『考古』一九六一―3）

⑮ 曾昭煥「試論湖熟文化」（『考古学報』一九五九―4）

⑯ 安志敏は、外彎刃タイプの石庖丁が農具であることをうたがっている。かれは石庖丁が刃先を上下に回転運動をさせることにより摘む道具であることを考えずに、穀物の穂首を引き切る、あるいは押し切る道具とするから、直線刃ないしは内彎刃のものだけが収穫具として用いられたとする結論にみちびかれたものであろう。もし、外彎刃タイプが農具でないとすれば、江南や北九州で明確に作物にともなって出土する外彎刃タイプの石庖丁の解釈が困難となる。筆者論文(上)「稲の収穫法」参照。

⑰ 国分直一「台湾先史時代の石刀」（『民族学研究』23―4）一九五九

⑱ (A)、楊建芳「仰韶文化的数個問題」（『考古』一九六二―5）
(B)、和島誠一、「東アジア農耕社会における二つの型」（『古代史講

座』2）一九六二

⑲ W・ワグナー・天野元之助訳、『中国農書』下巻第二章

⑳ 水野清一、「石鏃」（『考古学』八―8）一九三七

㉑ 甘粛博物館、「甘粛古文化遺存」（『考古学報』一九六〇―2）

㉒ 蔣縝初、「閩江蘇的原始文化遺跡」（『考古学報』一九五九―4）

㉓ 浙江省文物管理委員会「呉興銭山漾第一・第二次発掘」（『考古学報』一九六〇―2）

㉔ たとえば、㉓の遺跡のほか、南京仙鹿敦新石器時代遺跡清理簡報」（『文物』参考資料一九五五―8）

㉕ 黄河水庫考古工作隊河南分隊「河南陝県七里鋪商代遺跡的発掘」（『考古学報』一九六〇―1）

㉖ (A)、李済「殷墟有刃石器図説」（『歴史語言研究所集刊』23）一九五二

(B)、関野雄「殷王朝の生産的基礎」（『中国考古学研究』）一九五七

㉗ 無孔で背部に張り出しがあって紐かけの設備をほどこした鉄製爪鎌が黒龍江省の遼代遺跡より出土しているが、これもまた石庖丁の原理が鉄製品に伝えられたものであろう。

㉘ 丁穎「江漢平原新石器時代紅焼土中的稲穀考査」（『考古学報』一九六〇―2）

㉙ (A)、浜田耕作・梅原末治「金海貝塚発掘調査報告」（『大正九年度古蹟調査報告』I）一九二三

(B)、直良信夫『日本古代農業発達史』一九六一

㉚ ㉓と㉘の報告を参照のこと、なお、銭山漾よりは、日本型とインド型の両者が出土。

㉛ ①の文献および、盛永俊太郎『日本の稲』一九六二

㉜ 浜田秀男「イネの由来並に分布に就て」（『農業及園芸』10―7・8）一九三五

これは、華北・北鮮・南鮮ルートで日本に稲が伝来したとするもののうち、いちばん総括的で、考古学の結果もとりいれている。安藤説に賛成で、浜田説に否定的なものとしては、たとえば永井成三郎『米の歴史』一九六三

石庖丁資料表

一、資料表の項目は、(1)出土地、(2)型式および出土数量、(3)おおよその時代を示す伴出遺物、(4)出典の順になっている。

二、Aは打製石庖丁、Bは長方形、Cは半月形直線刃ないし内彎刃、Dは半月型外彎刃、Eは紡錘形の型式を示す。C、D、Eの型式では二孔が一般的であるので、特に断わっていない限りは、二孔のものを示している。一孔のものをも伴う場合にはまぎらわしくならぬよう、二孔と書いてある場合がある。

三、石庖丁のほかに、石庖丁形貝製品、貝鏃、石庖丁形土製品、石鏃の収穫具を伴出した場合は附記した。

四、原則として、写真、あるいは実則図で型式が明らかにされるもの、わたしが実物を見ることができたものに資料を限った。

五、一孔または二孔と書かれているのは、破片のため孔の数が不明確のものである。

六、（ ）のなかに示した数字は出土数量を示す。破片のため型式を決定できぬものは、出土数量よりはぶいた。破片の状態で発見されることが多いこと、出土数量を明記した報告書がすくないこと、一つの遺跡が何度も調査されなおしたりする場合があること等々により、石庖丁の型式を

数量的に比較することは困難である。資料表の数量は絶対なものではなく、一応の目やすとして見られたい。

七、〔　〕のなかに示した数字は、出典を示す。この数字は資料表末尾にあげた文献リストの番号と対応する。

八、日本については、北九州出土のD半月形外彎刃のものに限った。

九、資料表番号、30、31、32、95、178、179、180、204、206、のものは分布図よりはぶいた。

河南省

1．臨汝・大張　A(5)　仰韶晩期〔1〕
2．豫西・寒子　A　仰韶晩期〔2〕
3．豫西・水溝廟　A　仰韶晩期〔2〕
4．豫西・上瑤店　A　仰韶晩期〔2〕
5．豫西・伊川土門　A　仰韶晩期〔2〕
6．豫西・城東　A　仰韶晩期〔2〕
7．洛陽・澗浜　A(17)B一孔仰韶晩期〔3〕
8．栄陽・河王　B一孔(8)　石庖丁形貝製品(2)　竜山文化〔4〕
9．偃師・二里頭　B一孔(多数)　石鎌　竜山晩期より殷代〔5〕
10．濬・大賚店　B一孔　竜山文化〔6〕
11．池・仰韶　B一孔(多数)　仰韶文化・竜山文化〔7〕
12．陝・七里鋪　B一孔　B無孔　B鳥翼形一孔（合計23）石鎌(13)　石庖丁形貝製品(4)　殷早期〔8〕
13．輝・琉璃閣　B一孔(3)　石鎌(7)　殷代〔9〕
14．新鄭・潞王墳　B一孔　B無孔(合計9)　石庖丁形貝製品(1)　石鎌(5)　殷代〔10〕
15．鄭州・旭留村　B一孔　C一孔(合計23)　石鎌(28)　石庖丁形貝製品(8)　貝鎌(8)　殷代〔11〕
16．偃師・灰嘴　B一孔　殷代〔14〕
17．鄭州・洛達廟　B一孔(4)　C無孔(1)　殷代〔13〕
18．鄭州・二里岡　B一孔(1)　B一孔弧状断面(1)　石鎌(65)　殷代〔14〕
19．安陽・殷墟　B一孔　B二孔　C二孔　E二孔、殷代〔15〕〔16〕
20．陝・廟底溝　A(23)　B一孔(76)　B二孔(1)　第一期文化石庖形土製品のAと同型式のもの(65)　仰韶文化〔17〕
21．陝・廟底溝　A(10)　B一孔(18)、D一孔第二期文化(3)　石庖丁形土製品のB一孔と同型式のもの(3)　石鎌(1)　仰韶文化より竜山文化へのうつりかわりの時期〔17〕
22．陝・三里橋　A(9)　石庖丁形土製品のA　第一期文化と同型式のもの(7)　同B一孔と同型式のもの(5)　同C一孔と同型式のもの(1)　仰韶文化〔17〕

23．陝・三里橋　第二期文化B一孔(10)　石庖丁形土製品のB一孔と同型式のもの(6)　石庖丁形貝製品のB一孔と同型式のもの(1)　貝鎌(2)　竜山文化〔17〕

山西省

24．渾源・李峪　A　仰韶文化〔18〕

25．大原・義井　B一孔　B二孔　(合計9)　石庖丁形土製品でAと同型式のものとB一孔のもの(合計22)　土製鎌(1)　仰韶文化〔19〕

26．大同・雲岡　B一孔　仰韶文化〔20〕

27．夏・西陰　B一孔(1)　仰韶文化〔21〕

28．吉・雷神溝　B一孔(1)　新石器時代〔22〕

29．芮・南理教　B一孔(1)　仰韶文化〔22〕

甘粛省

30．甘粛省内　A(1)　京大文学部蔵

31．甘粛省内　B無孔(1)京大文学部蔵

32．甘粛省内　E破片二孔らしい(1)京大文学部蔵

33．寧定・円嘴　A(1)仰韶文化〔18〕

34．臨洮・寺窪山　A(1)　B二孔(1)　仰韶文化〔18〕

35．洮沙・灰嘴　A(3)　辛店文化〔18〕

36．蘭州・曹家嘴　A(1)　仰韶文化〔24〕

37．蘭州・西葉園　B一孔(1)　仰韶文化〔24〕

38．岷　A　仰韶文化〔25〕

39．臨洮・半山　B一孔(1)　仰韶文化〔18〕

40．武山　A　仰韶文化〔25〕

41．隴西　A　仰韶文化〔25〕

42．武威・大坓　B二孔(4)　仰韶文化〔26〕

43．武威・皇娘台　B一孔　B二孔　石鎌　斉家文化〔27〕

44．秦安　B一孔　新石器時代晩期〔28〕

45．山丹・四壩壩　B四孔　四壩文化〔29〕

46．民勤・黄嘴井　C(1)　E(1)　新石器時代〔20〕

47．永登　E(1)　新石器時代〔20〕

陝西省

48．鳳　A(100)　B一孔　B二孔Aで一孔を有するものもあり　仰韶文化〔30〕

49．華・柳子鎮　A・B孔は一孔か二孔か不明。アワ出土　仰韶文化〔31〕

50．横山・白露城　B一孔(1)　〔16〕

51．長安・五楼　B一孔(1)　仰韶文化〔22〕

52．長安・鎬京観　B一孔(1)　仰韶文化〔22〕

53．宝鶏・戴家溝　B一孔(2)　新石器時代〔22〕

54．府谷・武蘭溝　B一孔(2)　仰韶文化〔18〕

55．長安・濃西　B一孔(1)　新石器時代晩期〔32〕

56．華　B一孔(1)　殷代〔33〕

57董家・斉家　B二孔(1)　西周代〔34〕

58・邠・下孟　第二層　第三層　B二孔　B無孔(合計9)　石鎌　西周晩期またはそれよりややくだる時期〔35〕

青海省

59・西寧・朱家寨　B一孔　B二孔(合計9)　西周早期〔35〕

60・貴徳・羅漢堂　B一孔(1)　仰韶文化〔36〕

61・西寧・朱家寨　B一孔鳥翼形(3)　B二孔鳥翼形(4)　仰韶文化〔18〕

河北省

62・龍関・潘道　B二孔鳥翼形(5)　仰韶文化〔18〕

63・保定　B一孔半月気味の背(1)〔7〕

64・易・城角村　B一孔(1)〔37〕

65・唐山・大山城　B一孔(1)〔37〕〔38〕　B二孔　C孔の数不明　C石庖丁形貝製品　B二孔石庖丁形貝製品

66・張家口　竜山文化〔39〕

67・信陽・三里店　B一孔(1)　C二孔〔22〕

山東省

68・歴城・城子崖　C一孔(1)　竜山文化〔22〕

69・日照・両城鎮　C(3)　石鎌(5)　石庖丁形貝製品(3)　貝鎌(7)　竜山文化〔40〕　B無孔(2)　B二孔(3)　B破片(1)　C(1)　石鎌(3)　D　竜山文化〔41〕〔42〕〔15〕

70・泰安　B一孔(1)〔37〕

71・益都　B一孔(1)〔37〕

72・臨淄　E一孔らしい(1)　石庖丁形貝製品(1)〔43〕

73・梁山・青湖堆　B一孔らしい(1)　石庖丁形貝製品(1)　貝鎌(2)　竜山文化〔44〕

74・済南・大辛庄　B一孔(1)　C(2)　石庖丁形貝製品(11)　石鎌(13)　殷代〔45〕

75・平陰・朱家橋　B?(2)　石鎌(8)　貝鎌(多数)　殷代〔46〕

江蘇省

76・徐州・高皇廟　B無孔(1)　B二孔(1)　C(2)　B二孔石庖丁形貝製品　竜山文化

77・無錫・許巷　C(1)、青蓮岡文化〔48〕

78・無錫・仙蠡墩下層　B二孔　イネ出土　青蓮岡文化〔49〕

79・南京・北陰陽営　第四層　第三層　B　B七孔のもの　青蓮岡文化〔50〕　C　C一孔、D　D一孔湖熟文化〔50〕

80・南京・鎖金　C・D（CよりもDが多く出土　合計17）　石鎌(53)、湖熟文化異形(1)　C　C一孔　D　D一孔（CよりDが多く出土、合計（17）湖熟文化〔52〕

81・南京・大崗寺　B二孔　C　D　湖熟文化〔53〕

82・南京・安懐

83．新沂・花庁村　B二孔、青蓮岡文化〔22〕

84．贛榆・下廟墩　Cやや外彎刃ぎみ(1)　竜山文化〔54〕

85．諫壁・煙袋山　C無孔小形(1)　竜山文化系印文陶も伴う〔55〕

86．昆山・栄莊　D(2)　浙江竜山文化に相当する〔56〕

87．蘇州・金鶏墩　D(1)　新石器時代晩期〔57〕

浙江省

88．杭州・東湖　B二孔(1)　B三孔(1)　印文硬陶を伴出〔58〕

89．杭州・水田畈　下層　B一孔異形品　イネ出土　新石器時代晩期〔59〕

上層　B二孔異形品、B無孔、春秋末、〔59〕

90．呉興・銭山漾　下層　B(上下両層49)　イネ出土　竜山系新石器時代晩期〔60〕

上層　C〔80〕　D(28)　湖熟文化

91．淳安・逆賢　C三孔(1)　D(1)　湖熟文化？〔61〕

92．崇徳・洲泉北・道橋　D(1)　〔61〕

93．杭州・老和山　B二孔　D浙江竜山文化〔61〕〔62〕

福建省

94．閩北・蜈松鉗　B二孔　新石器時代　印紋硬陶・有段石斧を伴う〔63〕

95．閩北・明山　C無孔小形品　新石器時代　印文硬陶有段石斧を伴う〔63〕

96．福州・浮　B一孔(1)　石庖丁形土製品で雷文のあるもの(1)　印文硬陶を伴う〔64〕

97．光沢　B二孔　E印文陶を伴う〔65〕

広東省

98．宝安・蚌地山　B一孔(1)　印文陶・有段石斧を伴う〔66〕

湖北省

99．圻春・易家山　B一孔　B無孔　D一孔(1)（合計11）浙江竜山文化に近い〔67〕

100．石門・石家河　B一孔(1)　新石器時代　イネ出土〔68〕

湖南省

101．安仁・南坪　B無孔　B一孔(合計3)　新石器時代晩期〔69〕

江西省

102．清江・菅盆里　B一孔　B二孔　B三孔(合計59)　新石器時代晩期（戦国時代の前期にあたる）〔70〕

103．修水・　B一孔(5)　B二孔(20)　B一または二孔になる破片(6)　C一孔(5)　新石器晩期〔71〕

内蒙古

104. 赤峰・紅山後
第二住地
第一住地
C(4) E(2)
新石器時代〔72〕
C(2) E(3) 戦国時代に相当する時代〔72〕

105. 赤峰・夏家店
C(1) 殷代に相当する時期〔73〕

106. 喀喇沁右旗葉相
C(1) B破片(4)〔74〕

107. 五台溝
B C〔73〕

108. 包頭
B一孔(2) 京大文学部蔵

109. 旧綏遠省内
B一孔 弧状断面のもの(1) 京大文学部蔵

110. 包頭・転龍蔵
B一孔(1) B一孔の土製品(1)
細石器文化系の新石器時代〔75〕

111. 清水河・白泥窑子
B一孔 CまたはDに属するらしい一孔 (合計10) 土製品、細石器文化
C二孔(3)〔77〕
C二孔(1)〔22〕
E(1)〔78〕

112. 赤峰・烏蘭哈
B(1) 新石器時代〔79〕

113. 林西
C(1) 〔7〕

114. 滦平北丘陸
E(1) 〔80〕
E(3) 新石器時代 国学院大学蔵

遼寧省

115. 桓仁・孔家街
E(1) 新石器時代〔81〕

116. 綏東・慶雲寺

117. 小庫倫(綏東)

118. 旅順・大台山

119. 営城子・文家屯

120. 営城子・前牧城
B二孔(1) E(1) 国学院大学蔵

121. 旅順・老鉄山
B二孔(2) C(4) E(5) 新石器時代 京都国立博物館蔵

122. 旅順・文家屯
B二孔(1) 国学院大学蔵

123. 旅順・郭家屯
C無孔(1) 天理参考館蔵

124. 旅順・大孤山
E(1) 京都国立博物館蔵

125. 旅順・羊頭窪
B無孔(1) B二孔(1) E(17以上) 新石器時代〔82〕

126. 貔子窩・単砣子島
D(1) E(7以上) 新石器時代〔83〕

高麗寨

127. 亮甲店、望海堝
B二孔(1) E(8以上) 新石器時代晩期金属器を伴う 戦国・漢代にあたる〔83〕

128. 大連・浜町
C(2) E(4) 新石器時代〔82〕
E(1) B二孔(1) D(1) 新石器時代〔82〕〔84〕

黒龍江省

129. 洪子東
D(1) 新石器時代〔85〕

130. 旅大市・列子山
E(1) 新石器時代〔86〕

131. 慶安・牛場
E(1) 新石器時代〔87〕

吉林省

132. 新京・衛戍病院
B二孔(1) 新石器時代〔88〕

133. 江北・土城子
C(9) 新石器時代〔89〕

134. 汪清・百草溝
B一孔 B二孔 C一孔 C二孔 新石器時代〔90〕

136. 吉林・騒達溝　D二孔〔22〕

咸鏡北道

137. 潼関洞　C一孔　B　無文土器を伴う新石器時代〔91〕

138. 会寧附近　B一孔(3)　京大文学部蔵

139. 会寧城外　C一孔(1)　京大文学部蔵

140. 会寧附近新奥洞　B二孔(1)　B一または二孔(1)〔91〕

141. 会寧　B一孔(6)〔92〕

142. 会寧・烟壱外　B無孔〔91〕

143. 会寧・八乙面　E二孔あるいはCにすべきか(1)〔91〕

144. 上下三峰　E三孔のものを一つ含む(3)　刃部は直線的　B一孔(1)　無文土器を伴う　新石器時代〔91〕

145. 防垣鎮　C(3)　無文土器を伴う　新石器時代〔91〕

146. 鐘城・潼関鎮　B無孔(1)　B一孔(2)

147. 間坪　B二孔(1)〔93〕

148. 鐘城・下三峯　B二孔(1)〔93〕

149. 会寧・沙乙　E(1)　C(1)〔93〕

150. 会寧・五洞　B一または二孔(2)　京大文学部蔵

151. 応興・雄基　B無孔(2)　B二孔(1)　B一孔(1)　B一孔　B二孔　総督府博物館旧蔵〔98〕

平安北道

152. 江界・公貨里　B二孔(1)　C一孔異形品(1)　E二孔(2)〔94〕

平安南道

153. 大同江・美林里　D(2)　大形品　京大文学部蔵

154. 平壌附近　B一孔(1)　D(3)〔96〕

155. 龍岡・梅山里　D未成品(1)　京大文学部蔵

156. 大同・林泉南四里　D(1)〔98〕

黄海道

157. 殷栗・雲上里墺石　D(1)〔98〕

江原道

158. 春川・新北・泉田里　D(1)　支墓より石剣を伴い出土〔97〕

159. 春川・新南退溪里　B二孔(1)　石剣を伴う〔97〕

160. 江陵・城徳面または江東面　D(1)〔97〕

161. 江陵・丁洞・雲亭里　B二孔(1)　E(1)〔97〕

162. 襄陽・巽陽・密陽　E(1)〔97〕

163. 通川・通川・鉢山　E(1)〔99〕

164. 高城・梧岱・巨津里　D(1)〔99〕

京幾道

165. 広州・九里面岩寺里　D(1)　無文土器を伴う新石器時代〔121〕

166. 仁川郊外　D(1)〔98〕

忠清南道

167. 海美端山　E(1)〔98〕
168. 扶餘・巌岩羅福　D(1)〔98〕

慶尚北道

169. 慶州　異形石庖丁(2)　京大文学部蔵
170. 慶州　D(2)　京大文学部蔵
171. 慶州・川北面花山里　E(1)　京大文学部蔵
172. 慶州・川北面神堂里　D(1)〔100〕
173. 慶州・川北面神堂里　D四孔(1)〔100〕
174. 慶州・川東面九政里　E(1)〔100〕
175. 慶州・川北面花山里　D(1)　九大文学部蔵
176. 蔚山・兵営跡　D(1)　京大文学部蔵
177. 蔚山・下廂将峴里　D未成品らしい(3)〔102〕
178. 扶餘・午水甲　三角形二孔　左右交互に刃をつけたもの(1)〔102〕
179. 扶餘・旧衛里　三角形二孔、左右交互に刃をつけたもの(1)〔102〕
180. 舒川・東面　三角形二孔、左右交互に刃をつけたもの(1)〔102〕

慶尚南道

181. 金海・会峴里　D(2)〔103〕

台　湾

182. 台北・円山　B二孔(2)　新石器時代〔104〕
183. 台中・東勢・庄水寮　B一または二孔(3)　C一　または二孔(1)〔93〕
184. 台中・東勢・庄水寮　B二孔(2)　京大文学部蔵
185. 基隆・草苓　B二孔〔93〕
186. 清水溪・竹山　D一孔(1)　D二孔(2)　大形品、新石器時代〔104〕
187. 台中競馬場　D二孔大形品(1)〔104〕
188. 台中・清水　B(1)　D(2)　C(2)〔104〕　新石器時代
189. 台中・下馬厝　B二孔(3)　新石器時代〔104〕
190. 北山溪・大馬璘　B一孔(4)　B二孔(9)　B無孔(4)　B鳥翼形二孔(18)　B鳥翼形無孔(1)　石鎌(3)　新石器時代〔104〕〔105〕
191. 台中・水底寮　B二孔(4)　B破片(5)　B三孔(1)　B鳥翼形(5)　新石器時代〔104〕
192. 台中・大甲溪中流新社　B一または二孔(1)〔104〕
193. 台中・大甲溪下流大甲東　A(2)〔104〕
194. 台東・都巒　B二孔(7以上)　C一孔(1)　D二孔(1)　新石器時代〔104〕
195. 卑南大溪・卑南　B二孔(1)　新石器時代〔104〕
196. 鳳山丘陵・鳳鼻頭　B一孔(1)　C破片(1)　D破片(3)　E(1)　新石器時代〔104〕
197. 台南・寿山　C一孔(7)　新石器時代〔104〕

198. 高雄・大湖　B一孔(多数)　B二孔　C　新石器時代〔104〕

199. 台南・三本木　C一孔〔1〕〔104〕

200. 台南・永康丘地　B一孔(1)　C(1)〔104〕

201. 曾文溪・蕃仔田国母山　B一孔(3)　B二孔(1)　C一孔(1)　C破片(1)　新石器時代〔104〕

202. 大甲溪公老坪　B一孔(1)　B破片(1)〔104〕

203. 大安溪・二本松　B二孔(1)　B一または二孔(1)〔104〕

204. 大安溪・苑裡　異形石庖丁(1)

205. 台北・草漯青山　新石器時代〔104〕

206. 台南・斗六　B一または二孔(1)〔104〕　D三孔異形品(1)〔106〕

日本

福岡県

207. 飯塚市・立岩　D二孔(多数)〔107〕〔108〕　弥生式時代

208. 筑紫郡・春日町　D二孔(4)〔109〕　D二孔(1)〔110〕

須玖岡本　弥生式時代

209. 筑紫郡・春日町　D(5)　弥生式時代〔111〕

竹ヶ木

210. 福岡市・板付　D(8)　弥生式時代〔112〕

211. 八幡市・高槻　D(多数)　弥生式時代〔113〕

212. 遠賀郡・水巻町　D(5)〔114〕、D(1)〔115〕　弥生式

213. 宗像郡・福間町沓葉　D(1)　弥生式時代〔116〕

214. 粕屋郡・志賀島　D(1)　弥生式時代〔117〕

215. 田川郡・関の山洞窟　D(1)　弥生式時代〔118〕

216. 三潴者郡・筑邦町　D(3)　弥生式時代〔119〕

佐賀県

217. 三巻基郡・北蔵　D(2)　弥生式時代〔120〕

安村東

尾西尾

山口県

218. 下関市・伊倉町　D(2)　弥生式時代　長府博物館蔵

火ノ見山

立屋敷

石庖丁資料表出典

〔1〕河南省文化局文物工作隊「河南臨汝大張新石器時代遺跡発掘簡報」(『考古』一九六〇―六)

〔2〕考古研究所洛陽発掘隊「一九五九年豫西六県調査簡報」(『考古』一九六一―一)

〔3〕考古研究所洛陽発掘隊「洛陽澗浜古文化遺跡及漢墓」(『考古学報』一九五六―一)

〔4〕河南省文化局文物工作隊「河南栄陽河王新石器時代遺跡」(『考古』一九六一―二)

〔5〕考古研究所洛陽掘隊「一九五九年河南偃師二里頭試掘簡

報」(『考古学報』一九六〇—一)
〔6〕劉燿「河南濬県大賚店史前遺跡」(歴史語言研究所専巻十三、『田野考古報告』一)一九三六
〔7〕Andersson, J. G. "An Early Chinese Culture" 『中華遠古之文化』(Bulletin of the Geological Survey of China) 1923
〔8〕黄河水庫考古工作隊河南分隊「河南陝県七里鋪商代遺跡的発掘」(『考古学報』一九六〇—一)
〔9〕考古研究所『輝県発掘報告』(『中国田野考古学報告集』一)一九五六
〔10〕河南省文物工作隊報「河南新郷洛王墳商代遺跡発掘報告」(『考古学報』一九六〇—一)
〔11〕河南省文物工作隊第一隊「鄭州洒窩村遺跡発掘報告」(『考古学報』一九五八—三)
〔12〕河南省文物工作隊「河南偃師灰嘴遺跡発掘簡報」(『文物』一九五九—一二)
〔13〕河南省文物工作隊第一隊「鄭州洛達廟商代遺跡試掘簡報」(『文物参考資料』一九五七—一〇)
〔14〕安志敏「一九五二年秋季鄭州二里岡発掘記」(『考古学報』一九五四—八)
〔15〕李済「殷虚有刃石器図説」(『歴史語言研究所集刊』二三)一九五二
〔16〕水野清一「石庖丁」(『考古学』八—一 一九三七)
〔17〕考古研究所「廟底溝与三里橋」(『中国田野考古報告集考古学専刊』丁種九)一九五九
〔18〕Andersson, J. G. "Reserches into the Prehistory of the Chinese" (Bulletin of the Museum of Far-Eastrm Antiquities 15) 1943
〔19〕山西省文物管理委員会「大原義井村遺跡清理簡報」(『考古学報』一九六一—四)
〔20〕安志敏「大同雲岡附近的新石器時代遺存」(『文物参考資料』一九五三—五・六)
〔21〕李済『西陰村的史前遺存』一九二七
〔22〕安志敏「中国古代的石刀」(『考古学報』十 一九五五)
〔23〕夏鼐「臨兆寺窪山発掘記」(『考古学論文集』考古学専刊甲—四)一九六一
〔24〕夏鼐「蘭州附近的史前遺存」(『考古学論文集』考古学専刊甲—4)一九六一
〔25〕甘粛博物館「甘粛古文化遺存」(『考古学報』一九六〇—二)
〔26〕甘粛省文物管理委員会「甘粛武威県大坓附近的両個新石器時代遺跡」(『文物参考資料』一九五五—一一)
〔27〕甘粛博物館「甘粛武威皇娘台遺跡発掘報告」(『考古学報』一九六〇—二)
〔28〕伍歩雲「甘粛秦安県新石器時代居住遺跡」(『考古通訊』一九五八—五)
〔29〕安志敏「甘粛山四壩灘新石器時代遺跡」(『考古学報』一九五九—三)
〔30〕陝西省文物管理委員会「鳳県古文化遺跡清理簡報」(『文物参考資料』一九五六—二)

〔31〕黄河水庫考古隊華県隊「陝西華県柳子鎮考古発掘簡報」（『考古』一九五九―二）
〔32〕考古研究所灃西発掘隊「陝西長安灃西発掘簡報」（『考古』一九五九―一〇）
〔33〕許益「陝西華県殷代遺跡調査」（『文物参考資料』一九五七―三）
〔34〕陝西考古所渭水隊「陝西鳳翔・興平両県考古調査簡報」（『考古』一九六〇―三）
〔35〕陝西考古所涇水隊「陝西邠県下孟村遺跡発掘簡報」（『考古』一九六〇―一）
〔36〕Andersson, J. G. "The Site of Chochia chai" (Bulletin of the Museum of Far-Eastrm Antiquities 17.) 1945
〔37〕水野清一「石鏃」（『考古学』八―八）一九三七
〔38〕水野清一「北支那新石器時代の問題」（『考古学雑誌』二二―一一）一九三二
〔39〕河北省文物管理委員会「河北唐山市丈山城遺跡発掘報告」（『考古学報』一九五九―三）
〔40〕李済・梁思永ら、『城子崖』一九三四
〔41〕劉敦愿「日照両城鎮竜山文化遺跡調査」（『考古学報』一九五八―一）
〔42〕山東省文物管理所「日照県両城鎮等七個遺跡初歩勘査」（『文物参考資料』一九五五―一二）
〔43〕山東省文物管理所・「山東臨淄斉故城試掘簡報」（『考古』一九六一―六）
〔44〕考古研究所山東発掘隊「山東梁山青湖堆発掘簡報」（『考古』一九六一―一）
〔45〕山東省文物管理所「済南大辛庄商代遺跡勘査紀要」（『文物』一九五九―一）
〔46〕考古研究所山東発掘隊「山東平陰朱家橋殷代遺跡」（『考古』一九六一―二）
〔47〕江蘇省文物管理委員会「徐州高皇廟遺跡清理簡報」（『考古学報』一九五八―四）
〔48〕江蘇省文物工作隊「江蘇無錫許巷新石器時代遺跡」（『考古』一九六一―八）
〔49〕江蘇省文物管理委員会「江蘇無錫仙蠡墩新石器時代遺跡清理簡報」（『文物参考資料』一九五五―八）
〔50〕南京博物院「南京市北陰陽営第一・第二次発掘」（『考古学報』一九五八―一）
〔51〕尹煥章ら、「南京鎮金村遺跡第一・二次発掘報告」（『考古学報』一九五七―三）
〔52〕江蘇省文物工作隊大崗寺工作組「南京西善橋大崗寺遺跡的発掘」（『考古』一九六二―三）
〔53〕南京博物院「南京安懐村古遺跡発掘簡報」（『考古通訊』一九五七―七）
〔54〕南京博物院「江蘇楡新石器時代至漢代遺跡和墓葬」（『考古』一九六二―三）
〔55〕尹煥章・張正祥「寧鎮山脈及秦淮河地区新石器時代遺跡並調査報告」（『考古学報』一九五九―一）
〔56〕王徳慶「江蘇昆山朱莊新石器時代遺跡」（『考古』一九六〇―六）

〔57〕南京博物院「蘇州和呉県新石器時代遺跡」(『考古』一九六一―三)
〔58〕黄徳彰「浙江杭県東湖村発現古代文化遺跡」(『考古通訊』一九五七―一)
〔59〕浙江省文物管理委員会「杭州水田畈遺跡発掘報告」(『考古学報』一九六〇―二)
〔60〕浙江省文物管理委員会「呉興銭山漾遺跡第一・第二次発掘」(『考古学報』一九六〇―二)
〔61〕浙江省文物管理委員会『浙江博物館浙江新石器時代文物図録』一九五八
〔62〕蔣纘初「杭州老和山一九五三年第一次的発掘」(『考古学報』一九五八―一)
〔63〕福建省文物管理委員会「閩北建甌和建陽新石器時代遺跡調査」(『考古』一九六一―四)
〔64〕曾凡「福州浮村遺跡発掘」(『考古学報』一九五八―二)
〔65〕福建省文物管理委員会「福建光沢新石器時代遺跡的調査」(『考古学報』一九五七―一)
〔66〕莫稚「広東宝安新石器時代遺跡調査簡報」(『考古通訊』一九五七―六)
〔67〕湖北省文物管理委員会「湖北折春易家山新石器時代遺跡」(『考古学報』一九五八―一)
〔68〕「湖北天門新石器時代遺跡出土文物」(『文物参考資料』一九五五―八)
〔69〕湖南省博物館「湖南安仁新石器時代遺跡試掘簡報」(『考古』一九六〇―六)
〔70〕江西省文物管理委員会「江西清江営盤里遺跡発掘簡報」(『考古』一九六二―四)
〔71〕江西省文物管理委員会「江西修水背地区考古調査与試掘」(『考古』一九六二―七)
〔72〕浜田耕作・水野清一『赤峰紅山後』(東亜考古学専刊甲―六)一九三八
〔73〕考古研究所内蒙古発掘隊「中蒙古赤峰紹圧廟夏家店遺跡に就て」(『考古学雑誌』三二―一)一九四二
〔75〕内蒙古自治区文物工作組「内蒙古自治区発現的細石器文化遺跡」(『考古学報』一九五七―一)
〔76〕汪宇平「内蒙古清水河県白泥窑子村的新石器時代遺跡」(『文物』一九六一―九)
〔77〕八幡一郎「熱河省北部ノ先史時代遺跡及遺物」(『第一次満蒙学術調査研究団報告』六―三)一九三三
〔78〕八幡一郎「熱河省南部ノ先史時代遺跡及遺物」(『第一次満蒙学術調査団報告』六―一)一九三五
〔79〕陳大為「桓仁県考古学調査発掘簡報」(『考古』一九六〇―一)
〔80〕森修「満州石庖丁攷」(『人類学雑誌』五六―六)一九四一
〔81〕渡辺正気「関東州文家屯の石器」(『九州考古学』三・四)一九五八
〔82〕水野清一ら、『羊頭窪』(東亜考古学叢刊乙―三)一九四二
〔83〕浜田耕作『貔子窩』(東方考古学叢刊一)一九二九
〔84〕島田貞彦「先史時代の南満州」(『先史学人類学講座』一)

一九三八
〔85〕 旅順博物館「旅大市長海県新石器貝丘遺跡調査」(『考古』一九六二―七)
〔86〕 安志敏「記旅大市的両処貝丘遺跡」(『考古』一九六二―二)
〔87〕 黒龍江省博物館「黒龍江慶安牛場新石器時代遺跡清理簡報」(『考古』一九六〇―四)
〔88〕 小林行雄「新京発見の鉞形石器」(『考古学』一一―九)一九四〇
〔89〕 吉林省博物館「吉林江北土城子古文化遺跡及石棺墓」(『考古学報』一九五七―一)
〔90〕 王亜州「吉林汪清県百草溝発掘簡報」(『考古』一九六一―八)
〔91〕 八木奘三郎「朝鮮咸鏡北道石器考」(『人類学叢刊』乙 先史学第一冊)一九三八
〔92〕 小池奥吉『北鮮太古石器』一九一〇
〔93〕 小林行雄ら『本山考古室目録』一九三四
〔94〕 北鮮、科学院考古学民俗学研究所『江界市公遺里原始遺跡発掘報告』一九五九
〔95〕 北鮮科学院考古学民俗学研究所『会寧五洞原始遺跡発掘報告』一九六〇
〔96〕 藤田亮策「朝鮮の石器時代」(『東洋史講座』一八)一九四二
〔97〕 有光教一「朝鮮江原道の先史時代の遺物」(『考古学雑誌』二八―一一)一九三八
〔98〕 山本博「西日本弥生式問題」(『考古学雑誌』二六―一〇)一九三五
〔99〕 沢俊一「鎔笵出土の二遺跡」(『考古学』八―七)一九三七
〔100〕 斉藤忠「慶州附近発見の磨石器」(『考古学』八―七)一九三七
〔101〕 朝鮮総督府博物館『博物館列品図鑑』一一 一九三七
〔102〕 金元龍「蔚山郡下廂将峴里出土の石器土器」(『黄義先生古稀記念史学論叢』)一九五九
〔103〕 榧本亀次郎「その後の金海出土品」(『考古学』七―三)一九三六
〔104〕 国分直一「台湾先史時代の石刀」(『民族学研究』二三―四)一九五九
〔105〕 鹿野忠雄『東南亜細亜民族先史学研究一』一九四六
〔106〕 宮本延人「台湾先史時代概説」(『先史学人類学講座』一〇)一九三九
〔107〕 森貞次郎「古期弥生式文化に於ける立岩文化期の意義」(『古代文化一三―六)一九四二
〔108〕 中山平次郎「飯塚市立岩蛻ノ正の石庖丁」(『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』九)一九三四
〔109〕 島田貞彦「筑前須玖先史時代遺跡の研究」(『京都帝国大学文学部考古学研究報告』)一九三〇
〔110〕 中山平次郎「九州北部に於ける先史原史両時代中間期間の遺物に就いて(一)」(『考古学雑誌』七―一〇)一九一七
〔111〕 渡辺正気「筑紫郡春日町竹ケ本遺跡調査報告」(『福岡県文化財調査報告書』二三)一九六一
〔112〕 森貞次郎・岡崎敬「福岡県板付遺跡」(『日本農耕文化の生成』)一九六一

〔113〕三友国五郎「遠賀川流域地方の石器」(『考古学論叢』六)一九三七
〔114〕杉原荘介『遠賀川』一九四三
〔115〕山本博「筑前遠賀川畔の有紋土器に就て」(『考古学雑誌』二二—九)一九三二
〔116〕田中幸夫「筑前香葉の弥生式遺物」(『考古学雑誌』二七—一)一九三七
〔117〕山本博「福岡県粕屋郡遺跡遺物」(『考古学雑誌』二二—四)一九三二
〔118〕山本博「福岡県関の山洞窟とその遺物」(『考古学雑誌』二二—四)一九三二
〔119〕島田寅次郎「石器と土器・古墳と副葬品」(『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告』一三)一九三九
〔120〕松尾禎作「西尾束尾北方遺跡」(『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』八)一九四九
〔121〕有光教一『朝鮮櫛目文土器の研究』(『京都大学文学部考古学叢書』三)一九六二

(京都大学人文科学研究所助手)